

漁民の森の現状と課題

No. 8 福山 健一

はじめに

1 現状と課題

漁民の森の活動は、昭和63年に北海道漁業協同組合婦人部協議会の「お魚を殖やす運動」の活動が始ってから現在20年が経過しその活動は全国に広がっている。林野庁の集計によると平成19年度では約180件の活動報告があった。

しかし、その活動の中身は植樹活動が多く、育林活動はわずか3割弱にとどまっている状況である。育林は、森林を造成しその機能を高める為に必要不可欠であり、漁民の方々がその意義を理解した上で自ら育林に取り組むことを促していくことが、活動を長く続けていくために重要であり、また、国民参加の森林づくりを進める国有林にとっても重要な課題である。本研究では漁民の森の現状を調査し、育林活動が進んでいない原因を分析し、国有林としての対応策について考察した。

2 漁民の森の目的と意義

漁民の森とは、漁業関係者が魚介類の良好な生息環境の保全や形成などを目的として、上流域の森林に樹木を植栽し森林整備を行うものである。

また、このような、普段は森林から一番遠い存在である漁民の活動は、森林と海との関係を改めて問い直しているものと言える。更に、この活動が長く続けば、漁民の思いを流域に住む多くの住民が知ることによって、森林の持つ多面的な機能について理解を深め、また流域の環境保全をいかに進めるべきかという意識を育むことにつながるものと考えられる。



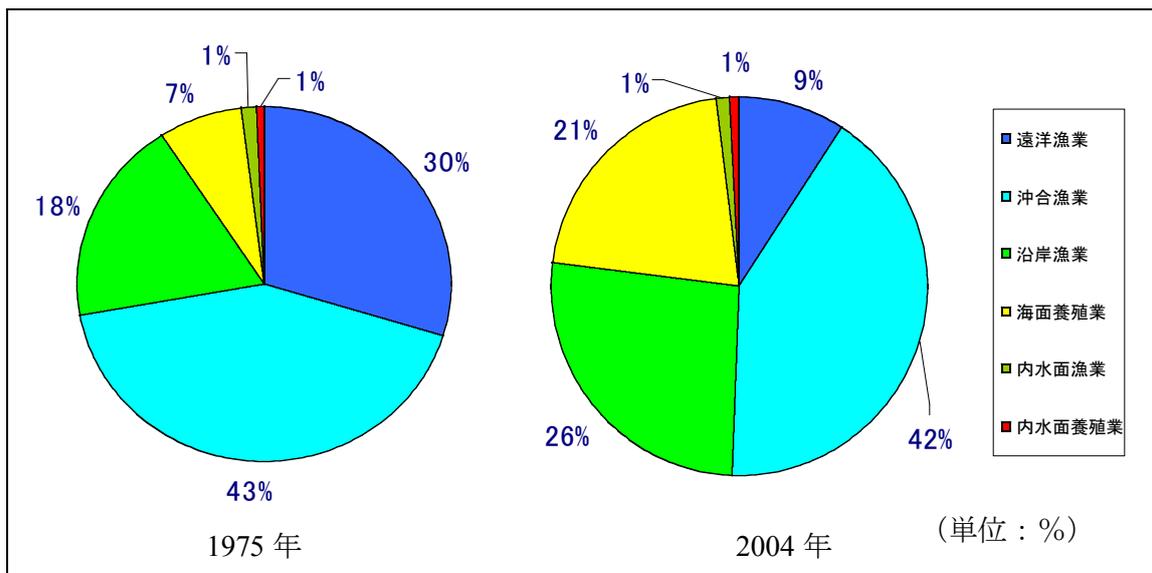
写真-1 漁民の森の活動

写真：中部森林管理局ホームページ

3 活動が始まった背景

漁民の森の活動が始まった背景には、近年の漁獲量の減少と、昭和52年（1977年）に200海里の排他的経済水域が設定されたことにより遠洋漁業が規制されたことに対して、漁業関係者が危機感を抱いたことがあるものと考えられる。また、養殖漁業の発達や遠洋漁業から沿岸漁業へのシフトなどで、漁師達が以前より川や、その源である森林を意識するようになり、そのことが結果的に漁業関係者の環境意識を育み、漁民の森の活動

へとつながったものと考えられる（図－1）。



図－1 漁業・養殖業部門別生産量の割合の対比

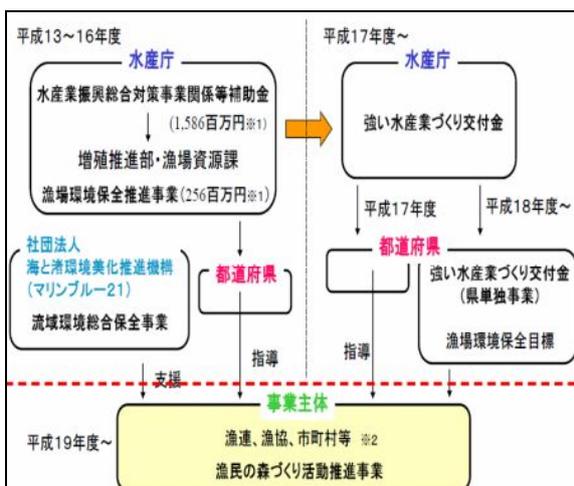
資料：農林水産統計 1978年版、2005年版

4 行政の動き

水産庁は、平成13年度から5年間、漁民の森の活動を支援する補助金を交付した（図－2）。

また、平成14年度から、北海道庁が「北の魚つきの森認定制度」を設け、北海道内における漁民の森の活動をサポートした。

国有林としても「国民参加の森づくり」の一環として積極的に活動の受入を行っている。



図－2 水産庁補助金の仕組み

出典：漁民の森運動の現状と有意性より

第1 研究方法

- 1 林野庁が毎年とりまとめている「水源地治山対策のあらまし」等の資料から漁民の森の活動状況の概要を把握した。
- 2 活動状況の概要を把握することにより解った問題点についてなぜ、そのような問題があるのか、その原因を推察した。
- 3 国有林で分収造林契約により漁民の森の活動を続けている漁業協同組合、市町村にアンケート調査と電話による聞き取り調査を行い、活動を行う上での問題点などを把握した。
- 4 調査結果を分析し対応策を考察した。

第2 調査結果

1 漁民の森の現状

(1) 活動件数

林野庁が都道府県からの報告を毎年とりまとめている報告書「水源地治山対策のあらまし」により「漁業関係者による植樹活動等」が報告されており、これを漁民の森の活動として現状把握を行った。

漁民の森の活動件数は図-3のとおりで、平成13年度には水産庁の補助事業が始まり、前年に比べて36件増の176件であった。平成14年度には、北海道庁による「北の魚付の森認定制度」が始まり、200件を越える活動報告があった。平成17年度には水産庁の補助事業も終了したことから徐々に停滞傾向も見られる。

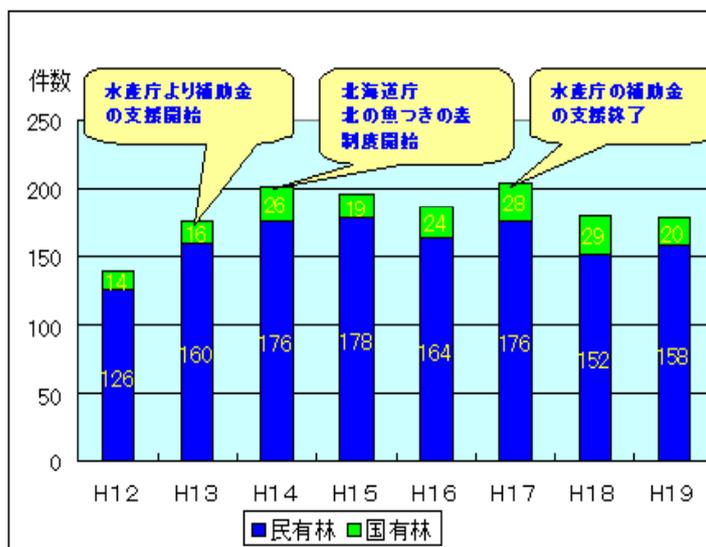


図-3 漁民の森の活動件数

資料：林野庁「水源地治山対策のあらまし」

(2) 活動の種類

活動の内訳を見てみると、そのほとんどが植樹活動であり、育林活動は全体の3割にも達していない（図-4）。国有林においても活動は年間20～30件程度であるが、育林活動は少なく、先に述べたように育林活動の活発化が漁民の森の活動を長く続けていくための課題となっている（図-5）。

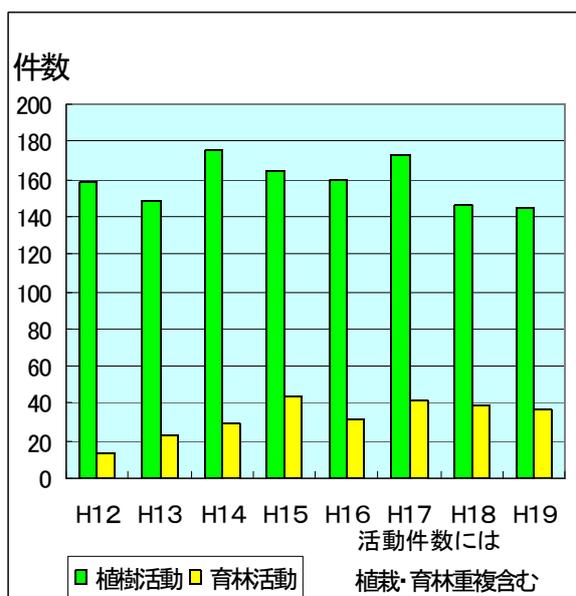


図-4 漁民の森の活動の内訳 (民有林・国有林計)

資料：林野庁「水源地治山対策のあらまし」

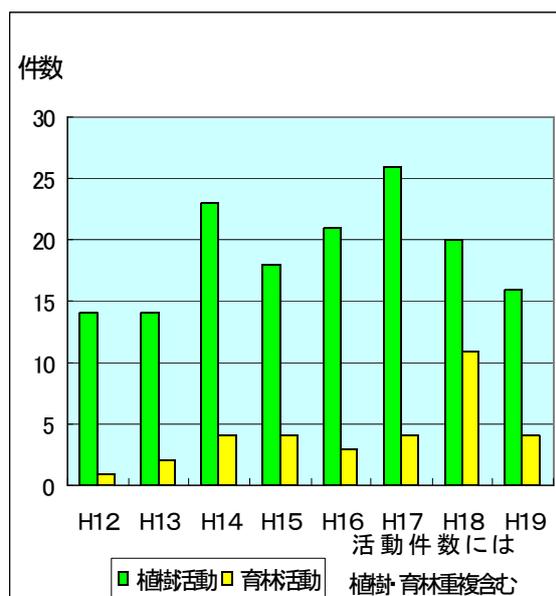


図-5 漁民の森の活動の内訳 (国有林)

資料：林野庁「水源地治山対策のあらまし」

(3) 植栽樹種

漁民の森において植栽された樹種の割合は、針葉樹が落葉針葉樹と常緑針葉樹を足しても2割弱にしかならないのに対し、広葉樹は落葉広葉樹、常緑広葉樹を合わせると全体の約8割を占めている。漁民の森における植栽樹種は多くが広葉樹である(図-6)。

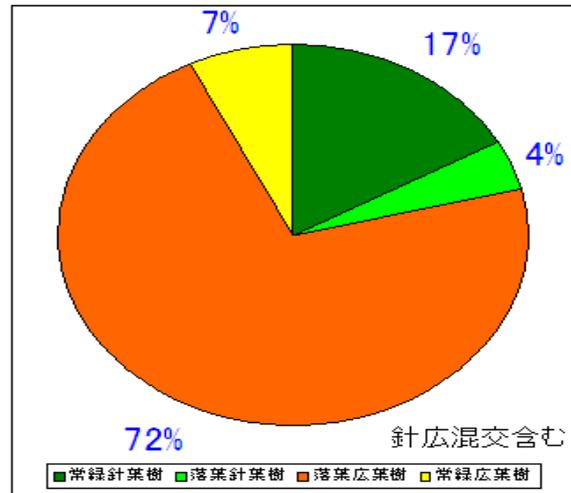


図-6 樹種割合

資料：林野庁「水源地治山対策のあらまし」

2 育林活動が少ない理由(推察)

これまで述べてきたとおり、過去の漁民の森の活動では、育林活動が少なく、活動を長く続けていくための課題になっていることがわかった。それでは、どうして育林活動があまり行われていないのか、既存の調査資料と筆者の経験からその理由を推察した。

(1) 育林への意識が低いこと

上述したように育林の報告が少ないのは、そもそも育林への意識が低いからではないかと考えられる。また、重労働を避けたいという思いがあるからではないかと考えられる。

(2) 技術的な問題

植樹に比べて下刈りや除伐などの育林は、ある程度専門的な技術を必要とする作業であり、漁民の森の参加者である漁民は、林業の素人であり、育林作業をどのように行っていけば良いのかわからずにとまどっているのではないかと考えられる。また、育林作業用の道具が無く、作業が出来ない場合もあるのではないかと考えられる。

(3) 活動資金の不足

我が国では年々漁獲量が減少しており、本業の漁業が不振の為、漁民の森のための活動予算が削られて、活動資金が不足しているのではないかと考えられる。また、自治体などの補助金がなくなって育林まで手が回らないのではないかと考えられる。

(4) 人手不足

漁師自体の減少、漁村の過疎化、少子高齢化で活動への参加者が年々減ってしまい、育林作業が出来なくなってきているのではないかと考えられる。

3 アンケート調査及び電話による聞き取り調査

既存の資料による調査だけでは漁民の森の活動の実態を把握することは困難である。また、育林活動があまり行われていないのはなぜなのか、上述したように推察を試みたが、実際に現場ではどのような問題が起っているのか把握すべく、アンケート調査を行い、続いて回答を頂いた団体に対して、補足するために電話による聞き取り調査を実施した。

(1) 調査対象・調査方法

今回は、数ある漁民の森の中から、国有林の中で国と分収造林契約を結び漁民の森の活動を行っている漁業協同組合、市町村の10団体を対象とした（表－1 参照）。選定の理由としては、国有林には植栽のみを行うタイプの漁民の森もあるが、分収造林契約においては育林作業を行うことが契約者の義務であるので、これらの分収造林の契約者が育林に関して一番問題意識が高いのではないかと考えたためである。

表－1 アンケートの調査の対象者

	調査対象	回答数
漁業関係者	7	6
自治体	3	3
計	10	9

調査は、2008年12月～翌年1月に、アンケート調査票を郵送して行った。10団体に対して調査を実施したところ、9件の回答があり、回答率は90%であった。

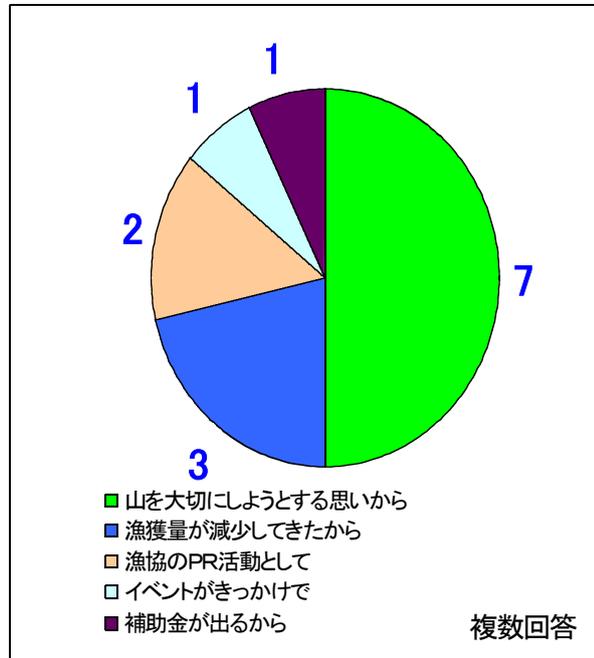
(2) アンケート調査の結果

ア 活動を始めたきっかけ

まず、「漁民の森の活動を始めたきっかけは何ですか」との質問を行った。

結果は「山を大切にしようとする思いから」という回答が最も多く、次に「漁獲量が減少したから」という回答となった（図－7）。

「山を大切にしようとする思いから」の中身としては、「海・川をきれいにして魚を増やすためと捉えている」、また、自治体関係者の意見として「十数年水産の係をしていて最も大切なことだと思ったから」という回答があった。



図－7 活動をはじめたきっかけ

イ 活動上の問題

次に「漁民の森の活動を行っていて問題になっていることは何ですか」と質問した。これに対しては ①人手不足、②活動意識の低下との回答が最も多く挙げられた（図－8）。

アンケート調査では、これらの問題が起きている理由は何かについても質問した。

まず、人手不足の理由としては、

①植栽作業には人が集まるが、下刈り等の育林作業になると人が集まらなくなる、②漁業従事者の高齢化で育林作業に従事できない人が増えてきている、③地域全体で過疎化や少子高齢化が進んでおり、年々人集めが大変になってきている、ということが挙げられた。

次に、活動意識の低下の理由としては、

①活動を続けていても魚が増えるなどの効果がなかなか現れないため、参加者から不満が出るようになった、②自治体関係者からは、以前にいた担当者の異動で漁業関係者に対するアピールが無くなった為に、活動への参加者が減ってきたという回答があった。

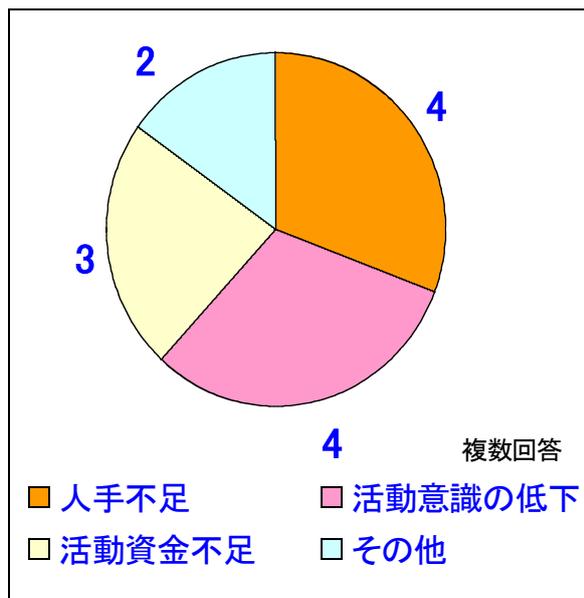


図-8 活動上の問題点

その他の問題点として、

①補助金を打ち切られると活動を続けていくことが困難になる、②漁民の森を設定する上で利便性の良い、作業するのに条件の良い場所を探すのが困難になってきている、という回答もあった。

(3) 電話による聞き取り調査

アンケート調査の結果を踏まえて、なぜ問題が起きているのかを分析するため、さらにアンケートの回答者に対して電話による聞き取り調査を行った。

活動を始めたきっかけとして「山を大切にしようとする思いから」という回答が多かったため、次の質問をした。

ア 山（森林）が魚介類に良い影響を与えている事を何で知りましたか。

- ①本・テレビで知った。
- ②漁協の仲間からから聞いた。県の指導で聞いた。

また漁民の森で植栽されている樹種の約8割は広葉樹であることが解ったため、次の質問をした。

イ 広葉樹を植栽していますが、何故広葉樹を植えるのですか。

- ①広葉樹の方が針葉樹より葉が大きく針葉樹より栄養分がたくさんあり、腐葉土の多い土壌を作る。
- ②広葉樹の方が針葉樹より漁場環境を作るのに適している。

という回答が得られた。

次に、人手不足が問題となっていることが解ったため、次の質問を行った。

ウ 人手不足を解消するためにボランティアの募集等考えていますか。

- ①地域では少子高齢化が進み、ボランティアを募集しようにもボランティアに成り

得る人がいない。

- ②育林作業を頼むにしても普通のボランティアでは林業の作業は難しく、ある程度の育林の知識のあるボランティアに頼みたいのだが、その育林の知識を持っているボランティアがなかなか見つからない。
- ③自治体関係者のコメントで、地方自治体も現在財政が苦しい状態であり、具体的な効果がすぐに得られないものに対しては予算・補助金はなかなか付けられない現状にある。

第3 考察

1 問題を生じさせている原因の分析

アンケート調査及び電話による聞き取り調査の結果を踏まえて、なぜ上述したような問題が生じているのか、その原因を分析した。

(1) 活動意識の低下の原因

- ・漁民は木を植えれば魚が増えるという期待を抱いて漁民の森の活動を行っている。
- ・漁民の多くは、木を植栽すれば、すぐに森林の機能が発揮されて、その効果として魚介類の生息環境が改善されて、すぐに魚が増えるという成果が現れることを期待しているが、これは過大な期待と言わざるを得ない。
- ・しかしながら、漁民の過大な期待に反して、現実には期待する成果が短期間のうちには得られないことに失望し、徐々に漁民の森の活動に対する意欲を低下させることにつながっている。

(2) 人手不足の原因

- ・漁民の住む地域では過疎化が進み、ボランティアを募集しようにも人材がない。
- ・森林技術を持ったボランティアがない。
- ・地方自治体では、効果がすぐに得られないものには予算、補助金は付けにくい。

2 問題解決の対応策

上述したような問題を解決するためには、次のような対応策が必要である。

(1) 活動意識の低下への対応

これまでの調査から、漁民は、育てようとしている森林について理解が不十分であるがゆえに、過大な期待を抱いていると言える。このため、漁民が森林を造成して、その機能を発揮させるには長い期間を要することなど森林を正しく理解する必要がある。

(2) 人手不足への対応

多くの漁民は、育林をなるべく他人に委託せず、経費をかけずに、出来るだけ自分たちで活動を行いたいと考えているが、漁師自体の高齢化や地域の過疎化により、自ら育林を行うことが困難となっている。このため、漁民の森の活動の担い手を確保していく必要がある。

まとめ

1 提案

これまでの調査結果と考察を踏まえて、漁民の森の活動を受け入れる立場の国有林として、どのような対応策を取るべきかを以下に提案する。

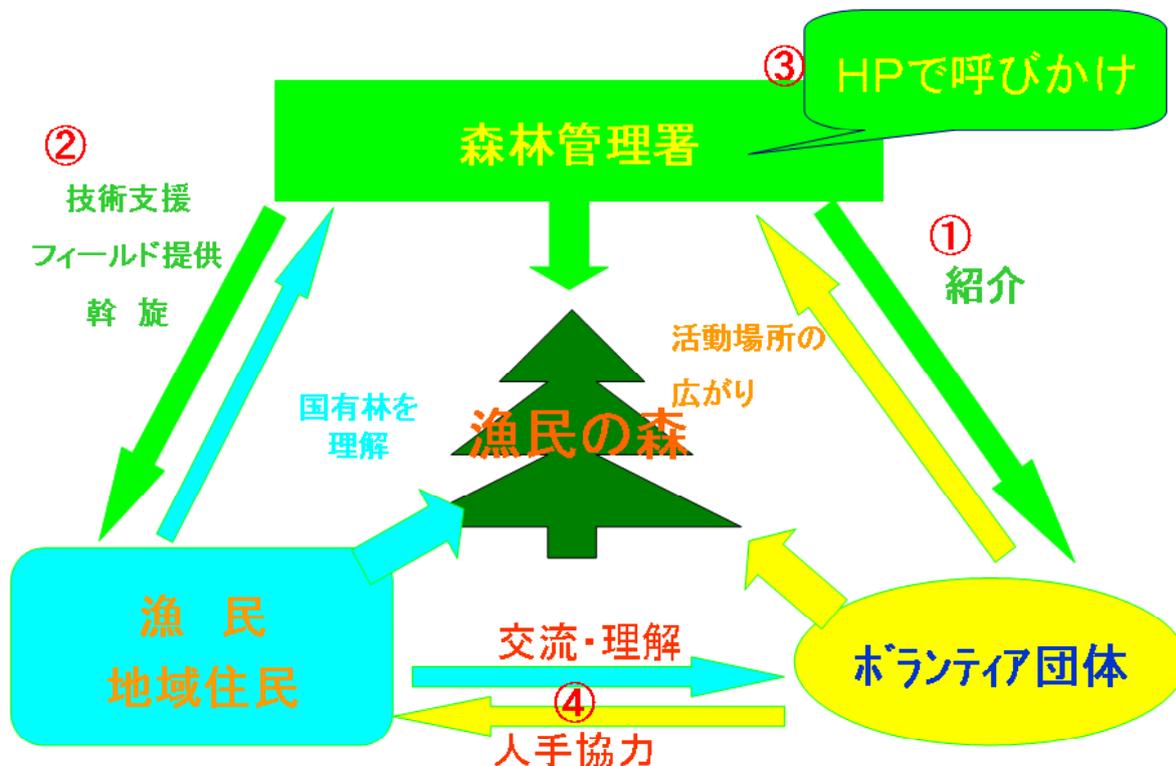
まず、活動に対する意識低下の対策として以下のことを漁民に説明し、理解してもらうことが重要である。

- ①人の手で作る森林においては育林作業をしていく必要があること。
- ②森林が持つ様々な機能が発揮されるには、長い年月を要すること。
- ③海や川の環境には、森林だけでなく多くの要因が影響を及ぼすため、森林を整備すれば、魚介類が必ず増えるというような単純な因果関係は成り立たない。しかし、森林の持つ水源かん養や土砂流失防備などの機能が魚介類にプラスの影響を与え得るのは確かであり、このことを誤解のないように伝えていくこと。
- ④我が国では、漁民が好む広葉樹については未だ森林施業体系が確立しているとは言い難いが、針葉樹については長い経験を有しているため、森林管理署も技術支援がしやすいこと。

以上のような森林に関する正しい知識や我が国での技術レベルの現状の説明を通して、漁民が、森林そのものや森林と海や川との関係についてより深く理解してもらうことにより、持続的な漁民の森の活動、すなわち、より質の高い漁民の森の活動を続けていくことが可能になると考える。

また、そのような活動が継続されることによって、協賛者・協力者が増える可能性もあり、資金提供等のメリットが出てくる可能性も考えられる。

次に、人手不足の対策として次のような取組を行うことを提案する（図－9）。



図－9 人手不足対策の模式図

①森林管理署は、国有林で漁民の森の活動を行う担い手として森林ボランティアを斡旋する。森林ボランティアにとっても新たな活動の場ができ双方メリットがあると考えられる。

②漁民に対してはフィールドの提供と技術支援を行う。国有林としては活動を通じて国有林の活動を理解してもらえメリットがあると考ええる。

③森林管理署のホームページで漁民や森林ボランティア団体の活動内容を定期的に紹介すれば、より多くの参加者を集めることが可能となる。

④漁民は人手不足が解消され、ボランティア団体としては自らの活動が漁民に理解され、今後、漁民の住む地域でも活動がしやすくなる。

このような連携を進めることでお互いが相手の活動を理解し、より質の高い活動になると考える。

また、漁民は地域住民を漁民の森の活動に巻き込むことで、活動の担い手の裾野が広がり、活動を長期的に維持できると考える。

2 今後の課題

今回の調査の結果、漁民の森に現在多く植栽されているのは広葉樹であることが解った。しかし、未だ我が国では広葉樹施業は確立しておらず研究の段階である。このため早急な広葉樹の施業の確立も急がれる。

また、未だ森林が海や川にどんな影響をどれだけ与えるのかや、それぞれの場所に生息する動物にどのような影響を及ぼすのかについては、これらの分野における総合的な研究がほとんど行われてこなかったことから定かではない。そのため、この分野における総合的な研究が行われることが必要である。

謝辞

最後に課題研究を進めるに当たり示唆に富む御助言を頂いた森林総合研究所多摩森林科学園赤間亮夫園長ほか、ご指導頂いた多くの皆様、大変お忙しい中アンケート調査及び電話による聞き取り調査にご協力いただいた各漁業協同組合、市町村の担当者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

【参考文献・資料】

- (1) 森・海・川のつながりを重視した豊かな漁場海域環境創出方策検討調査報告書
水産庁・林野庁・国土交通省 (平成16年)
- (2) 林野庁 「水源地治山対策のあらまし」(平成12年度版～平成19年度版)
- (3) 農林水産統計 (1978年版、2005年版)
- (4) 漁民の森運動の展開に見る共同的な資源管理 兵庫県立大学経済経営研究所
- (5) 森が消えれば海も死ぬ 松永勝彦著 (1993年)
- (6) 森林ボランティア論 山本信次著
- (7) 森は海の恋人 畠山重篤著
- (8) 漁民の森運動の現状と意義 <http://ffpsc.agr.kyushu-u.ac.jp/jfs-q/research61.html>
- (9) マリンブルー21ホームページ <http://www.marineblue.or.jp/21/index.php>

- (10) 和歌山県ホームページ
<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/071000/gyominnnomori.html>
- (11) 中部森林管理局ホームページ（写真－１）
http://www.kokuyurin.maff.go.jp/action/nagoya/nago_14_11.html
- (12) ＮＧＯ法人天明水の会ホームページ <http://www.mizunokai.com/>
- (13) 漁民の森運動の現状と有意性（図－２）
<http://ffpsc.agr.kyushu-u.ac.jp/policy/irimajiri/07irimajiri1.pdf#search='漁民の森 島根県'>

【業務資料・調査協力】

福岡県庁 農林水産部 林業振興課
常呂漁業協同組合
大樹漁業協同組合
佐井村役場
小袖海女の森分収造林組合
ＮＰＯ天明水の会
緑川漁業協同組合
日南市漁業協同組合
南大隅町役場
屋久島町宮浦支所
水産庁 増殖推進部 漁場資源課 生態系保全室
水産庁 増殖推進部 漁場資源課 海洋保全班管理係
林野庁 治山課 水源地治山対策室
林野庁 業務課 地域振興・分収林班
林野庁 経営企画課 経営計画班
北海道森林管理局 網走中部森林管理署